

夫婦パスタ日記

第9話『だし香る和風明太子パスタ』

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

寺川 千晴（20）（25）スーパー『ユーミー』レジ担当
寺川 和也（22）（27）千晴の夫、

長沢 聡志（30）スーパー『ユーミー』客、デザイナー
長沢 理恵（55）聡志の母

柏原 啓造（43）（48）千晴の父、漁師、愛媛在住
柏原 明日香（41）（46）千晴の母、愛媛在住

スーパー『ユーミー』レジ担当チーフ

スーパー『ユーミー』のパート職員たち

スーパー『ユーミー』のスタッフたち

スーパー『ユーミー』の客たち

郵便局員

1 スーパー『ユーマー』・店内

開店時間――。

主婦層を中心に、客が次々に入店して
くる――スタッフたちが「いらつしや
いませ」と迎え入れている。

× × ×

青果コーナー、精肉コーナー、鮮魚コ
ーナー、総菜コーナーなど、各コーナ
ーで客たちが品定めをしながら、自ら
の買い物カートに商品を入れていく。

× × ×

レジで、客が運んできた買い物かごの
中の商品のバーコードを手際よくスキ
ャンしていく千晴。

千晴（N）「特売日の水曜日、私のパート先
であるスーパーマーケット『ユーマー』は
開店の十時から、地元の客たちで溢れてい
た。折込チラシや公式アプリのクーポンと
いう効果もあり、今や地元で一番の集客力
を誇るスーパーマーケットになっている。

私がここで働き始めて、この秋で三年。働き始めてすぐにレジが『セミセルフ形式』と『セルフ形式』になったので、私たちレジ担当の仕事は、商品のバーコードスキヤンのみで、会計はタッチパネルで客自身が操作することになった」

千晴、レジ操作をして、客に、

千晴「五番の精算機でお会計お願いします」

と、買い物かごを運ぶ——次にやってきた客に、

千晴「いらつしやいませ。商品お預かりします」

タイトル——『夫婦パスタ日記』

第〇話『だし香る和風明太子パスタ』

2 スーパー『ユーマー』・店内

買い物カートを引いて、青果コーナーを歩いている聡志——ふと視線の先の人影の存在に気づき、

聡志「母さん」

と、隣の精肉コーナーで肉のパックを
見ていた聡志の母・理恵（55）が気
づいて、

理恵「あら、聡志」

聡志「珍しいこともあるもんだ、母さんが買
い物するなんて」

理恵「お父さん出張で昨日からいないのよ。
だから、たまには自分で買い物行こうと思
ってね」

聡志「そうだよ。外に出ることだって、気分
転換なんだから」

理恵「あんた、仕事のほうはどう？」

聡志「まあ何とかやってるよ。この『ユーミ
ー』のチラシだって、前から受注してくれ
る印刷会社の依頼でいつも俺が作ってるん
だから」

理恵「へえ、ちゃんとした仕事してるんだ」

聡志「（苦笑して）失礼な。母さんは、何と
か順調？」

理恵「まあ、スランプに陥ることなんてしょっちゅうだけどね」

聡志「だったらなおのこと、気分転換しないと」

と、視線を下に送ると、理恵の買い物カートの下段に、カップ麺の段ボール箱が乗せられている。

聡志「え、カップ麺箱買いしてるの？」

理恵「ご飯の支度が億劫になることだってあるのよ。お昼はカップ麺で十分なんだから」

聡志「俺も仕事根詰めてやっちゃう時は、ご飯作る時間も惜しいからインスタント食品に頼ることはあるけど、箱買いはすげえな」

理恵「良いのよ、お父さんだって何も言わないんだから」

聡志「父さん、まだ出張あるんだ」

理恵「そりや役員だもの、いろいろあるんじゃないかしらね」

聡志「母さんの仕事も手伝って、よくやるよ、父さんも」

理恵「また、唯ちゃんと一緒に遊びに来なさ

いね」

聡志「年末には帰る予定だから」

理恵「はいはい」

×

×

×

レジ前に並んでいる聡志——周囲のレジも客の列ができています。

レジから千晴が顔を出して、

千晴「こちらのレジどうぞ」

聡志、気づいて千晴のレジにやってくると、買い物かごを出す。

聡志「お願いします」

千晴「ポイントカードもらいます」

聡志「あ、ちよつと待ってくださいね」

と、鞆から財布を取り出し、中からポイントカードを出す。

千晴「（レジ操作をして）長沢さん、大分ポ

イント溜まりましたよ」

聡志「そりゃ、これだけ買い物してればね」

千晴「六番の精算機へ、どうぞ」

聡志「どうも。じゃあ、また」

と、精算機で会計をする――入れ替わるように、レジ担当チーフがやってきて、

チーフ「千晴ちゃん、休憩入って。私が代わるわ」

千晴「あれ、もうそんな時間ですか？　では、お願いします」

3 同・事務所

昼休憩を取っているパート職員たちが、家から持ってきた弁当を片手に、井戸端会議をしている。

パート職員A「すぐお米が無くなっちゃって、品出しが大変なのよ。それにお米なんて重たいでしょ。私ね、湿布貼ってコルセット巻いてるわよ。腰痛めないように」

パート職員B「うちの青果コーナーはね、キヤベツが普段高いのに、特売の日だけ安くするでしょ。あつという間に無くなっちゃ

うのよ。キャベツもね、一個は良いけど箱で運んだらやっぱり重たいでしょ。ぎっくりにならないように気を付けてるのよ」

パート職員C「総菜コーナーってさ、すぐ売れるのと売れ残りのものが極端すぎるでしょ。店長はバランス良く売ってくれなんて言うけど、そんな簡単に行かないわよ。それが分かったら苦労しないって話よ」

と、千晴が入ってくる。

千晴「お疲れ様です」

パート職員A「あら、今から休憩？　千晴ちゃん。さすが若いから、よく働くわね」

千晴、ロッカーから家で作ってきた弁当箱を取り出しながら、

千晴「今日って、何か安いがあります？」

パート職員C「お醤油がお買い得品だってチラシに載ってたわよ。ただ、お一人様二本限りだって」

千晴「醤油かあ……。あれ、うちもう残ってなかったかな？」

と、鞆の中からスマホを出すと、アプリを起動して、メッセージを送る。

4
アパート・全景

5
同・寺川家・寝室

一Kの造り――。

ベッドで眠っている千晴の夫・和也

(27) ――ゆっくりと目を開けて、
大きなあくびをする。

和也、スマホの画面を見る――ネット
ニュースやSNSの通知の中に紛れて、
千晴からのメッセージも届いており、
内容を確認する。

千晴のメッセージ&声「うちの醤油、余って
たっけ？」

和也、慌てて飛び起きる。

6
同・同・リビング

台所で調味料が並んだラックをチェッ

クしている和也——スマホにメッセージを送る。

和也のメッセージ&声「開いてるやつが、一本あるよ」

と、もう一度大きなあくびをする和也——そのまま寝室に戻る。

7 同・同・寝室

和也が入ってくる——化粧台に飾られている写真立ては、千晴と和也が自撮りしたツーショット。

和也（N）「俺が二歳下の千晴と結婚したのは、今から五年前。俺が大学、千晴が短大をそれぞれ卒業するタイミングだった」

8 コンビニ・店内（回想）

アルバイト店員としてそれぞれ働いている千晴と和也。

和也（N）「バイト先のコンビニの先輩後輩だった俺たちは、気がつけばお互いを意識

し、付き合うようになった。秋が深まる十月のある日に、千晴の妊娠が発覚。田舎から上京してキャンパスライフを満喫していたと思っていた千晴の両親は当然妊娠に驚き、俺は結婚の許しを得るために千晴の故郷である愛媛まで赴いた」

9 愛媛・柏原家・玄関（同）

千晴の実家——昔ながらの日本家屋の造り。

中から和也が突き飛ばされて出てくる——鬼の形相で、その後に出てくる千晴の父・柏原啓造（当時43）と、慌てて止めようとする千晴の母・明日香（当時41）。

啓造「帰れッ……！（と和也に掴みかかる）その面、二度と見せんナッ」

明日香「（啓造を止めて）ちよつとあんたッ……」

和也「帰りませんッ……。（と土下座をして）

お願いします。結婚させてください」

明日香「（啓造に）あんだ、中でゆっくりと
……」

啓造、ムツとしたまま中へ入っていく。

和也「……」

明日香「（微笑んで）さ、上がってつかあさい」

10 同・同・居間（同）

土下座したままの和也。

一升瓶の酒を湯飲みに注いで、無言のまま飲み続けている啓造——呆れ顔で啓造を見ている明日香。

明日香「（啓造に）あんだ、何か言わな」

啓造「（飲み続けて）……」

明日香「千晴のこと考えて、来てくれたんじやけん」

啓造、卓袱台に勢いよく湯飲みを置く——中から酒が零れ落ちる。

和也「……！」

啓造、和也に迫るように至近距離まで
来ると、

啓造「お前、責任取れるのか」

和也「働いて、三人で家族を築き上げます

（と深々と土下座する）」

明日香「（啓造に）あんた……」

啓造「分かった。男に二言は無いな。その代わり、娘を不幸にさせたら、ただで済むと思うな」

和也「はい……」

啓造をじっと見つめる和也と、睨みつけるように和也を見つめる啓造——安堵の笑みを一人浮かべている明日香。

和也（N）「地元で漁師をしている千晴の父は厳格かつ見た目も強面で正直チビりそうだったが、この時の俺は既に覚悟を決めていた。俺たちは残りの大学生活が残っていたので、それぞれキャンパスライフを送り続けた。卒業式のタイミングで、千晴は妊娠七ヶ月だった」

11 病院・病室（同）

ベッドで横になって休んでいる千晴と、丸椅子に座って付き添っている和也。

和也（N）「しかし、結婚をして間もない妊娠八ヶ月目に、千晴は流産してしまった」

千晴「ねえ。別れよう、私たち」

和也「俺たちは確かに、子どもがきっかけで結婚した。けど、流産したから別れるなんて、俺はそんな単純じゃないぞ」

千晴「和也……」

和也「俺、親父さんに言われたんだよ。『娘を不幸にさせたら、ただで済むと思うな』って、すごい剣幕で。だから、俺はどんな手を使ってでも、千晴を幸せにする。俺がそうしたいから」

千晴、ベッドに顔をうずめて、声を押し殺して涙を流す。

12 アパート・寺川家・寝室（現在）

写真を見ている和也。

和也（N）「あれからもう五年近くが経ち、千晴も立ち直って、今はすっかりスーパーマーケットの仕事に打ち込んでいる。俺も隔週夜勤で大手部品メーカーの工場勤務をしており、何とか夫婦だけの時間を大事にしようとしていた」

と、玄関のチャイムが鳴る。

13 同・同・居間→玄関

和也、和也はインターホンのボタンを押した。

和也「はい？」

と、インターホンから郵便局員の声がする。

郵便局員「郵便局です。お荷物が届いております」

和也「はい」

と、玄関に向かい、ドアを開ける――
ドアの前で段ボール箱の荷物を持った

郵便局員が立っている。

郵便局員「寺川千晴さんにお荷物です。『ワレモノ注意』なのでお気をつけてお持ちください」

和也「はい、ご苦労様です」

と、荷物を受け取ると、ドアを閉める。

和也、荷物の伝票を見る――差出人に

『柏原明日香』と記載。

和也「ああ、お義母さんからか」

14 同・全景（夕）

15 同・玄関ゝ居間

千晴が帰宅する。

千晴「ただいま」

と、作業着姿の和也が寝室から出てくる。

和也「お帰り。お義母さんからの荷物、そこにあるよ（と指さす）」

千晴「開けてないの？」

和也「だって千晴に届いたやつだろ。いくら
愛媛のお義母さんからだって、俺が開ける
わけには」

千晴「まあ、それもそうか」

和也「じゃ、行ってくる」

千晴「行ってらっしゃい」

と、出ていく和也。

千晴「お母さん、今回は何送ってきたんだろ」

千晴（N）「漁師の父を支えてきた母は、と
にかく家族のために何かをすることを生き
がいにしているような女性だ。私が大学進
学のために上京した後も、事あるごとに生
活用品や調味料、そして母の手作りである
煮魚や佃煮といった故郷の味を宅配便で届
けるほどだった」

千晴、段ボール箱のガムテープを剥が
して中を開けると、瓶詰めされた醤油
とみりん、母の手作りと思われるオレ
ンジ色のニット帽が入っている。

千晴「醤油買っちゃったよ……」

と、底にはもう一つ、チャック袋のパッケージに入った出汁パックの詰め合わせが入っていることに気づく。

千晴（M）「（パッケージを見て）愛媛の会社で作ってる出汁なんだ」

と、鞆からスマホを出し、電話をかける。

千晴「（電話に）あ、母さん。今、もしかして晩ご飯の準備中だった？」

16 愛媛・柏原家・居間（夕）

台所で夕飯の支度をしている明日香

（46）が、スマホを持ちながら話している。

明日香「うん。これからご飯食べるところよ。どしたん？」

千晴の声「荷物届いたよ、ありがと」

明日香「ニット帽、千晴に似合うんじゃないか
思うて作ってみたんよ。また写真撮って送
ってね」

千晴の声「はいはい。それよりさ、何か出汁のパック入ってたけど、何これ？」

明日香「松山にある会社らしいのよ。たまたまスーパーで見つけたら、これがまた美味しい出汁でね。ネットショップでも、いろんな種類の出汁が売ってたけん買ってみたの。その中の一つを、そっちに送ったってわけ。確か『海鮮だし』って書いてない？」

17 アパート・寺川家・居間

スマホで電話をしている千晴が、出汁パックのパッケージを見る。

千晴「うん。しかも、まぐろ、かつお節、いわし、しいたけ、えび、昆布、あごって、七つの食材を配合したって書いてあるから、結構すごそうだね」

明日香の声「パックで出汁取るのもええし、パックの袋破って、調味料としても使えるんじゃないって。出汁の取り方は、パッケージ

に書いてある通りよ。千晴も何か作ってみな」

千晴「ありがとう。何か作ってみるわ」

と、電話越しに啓造（48）の声が聞こえてくる。

啓造の声「おい、飯もうできたか？」

明日香の声「今持ってくから」

千晴「今からご飯なんでしょ。じゃあ、切るね。はい」

と、電話を切ると、もう一度段ボール箱の中を見る――一枚の手紙が添えられていことに気づく。明日香からの手紙である。

明日香の声「たまには、和也さんところへ帰ってきなさいね。お父さん、口ではガミガミと言ってるけど、やっぱり一人娘が可愛いから」

千晴「母さん……」

19 同・寺川家・居間

テーブルの椅子に座っている千晴が、
海鮮出汁パックのパッケージを、じつ
と見つめている――と、寝室から和也
が起床してくる。

千晴「あ、起きた？」

和也「よく寝たわ」

千晴「（パッケージを見て）……」

和也「どうしたんだよ、そんな難しい顔して」

千晴「え？」

和也「眉間にすげえ皺寄ってるぞ」

千晴「（パッケージを和也に見せて）いや、

これこの間、母さんが送ってきた出汁パッ

クなんだけどね」

和也「（向かい合うように座って）出汁パッ

ク？」

千晴「普通に出汁も取れるし、パックを破つ
て調味料代わりにも使えるらしいんだけど、
何か作れる料理ないかなあと思って。お昼、

何作ろうかな」

と、立ち上がって台所へ行き、冷蔵庫の冷蔵室と野菜室を開ける。

千晴「うーん、どうしようかな」

和也「（後に続いて）何かあるか？」

と、冷凍室を開ける。

和也「あ、これ使えるか？」

と、冷凍保存された明太子のパックを取り出す。

千晴「ああ、二週間前だっけ、ふるさと納税で届いたやつ」

和也「そうそう」

千晴「明太子だったら、パスタでも作ろうかな。あの出汁パックも使えば、和風明太パスタみたいな作れるでしょ」

和也「さすが、海育ちは発想が違うな」

千晴「私作つとくから、和也、布団干しとい
て」

和也「はいはい」

×

×

×

以下、調理工程をカットバックで。

千晴、冷凍された明太子を二本袋から取り出し、耐熱容器に移して、電子レンジで解凍する。

千晴（M）「とりあえず一分半で良いっか」

×

×

×

千晴、野菜室に入っている割引シールの貼られた大葉の袋を取り出し、茎をちぎって三角コーナーに捨てる。

そして、まな板の上で五枚ずつに分け、千切りにする。

千晴（M）「この大葉は十枚入り。茎をちぎ

ったら、五枚ずつに分けて、千切りにする」

×

×

×

千晴、解凍した明太子を包丁の峰を使い、身を取り出す。

千晴（M）「解凍して柔らかくなった明太子二本は、包丁の峰の部分を使って身を取り出す」

×

×

×

千晴、ボウルを置くと、その中に明太子、破った『海鮮だし』のパックを入れ、計量スプーンでマヨネーズ、オリーブオイル、レモン汁、醤油を入れ、泡立て器で混ぜ合わせていく。

千晴（M）「ボウルに明太子の身二本分、破った『海鮮だし』のパック一袋、マヨネーズ大さじ二杯、オリーブオイル大さじ二杯、レモン汁小さじ一杯、醤油小さじ二杯を入れ、泡立て器で全体をしっかりと混ぜ合わせていく」

× × ×
千晴、鍋に水と『海鮮だし』のパックを入れて火にかける。

千晴（M）「鍋に水八百ミリリットルと、『海鮮だし』のパック二袋を入れて火にかける」

× × ×

鍋の水が沸騰している。

千晴（M）「沸騰したら中火にして、そのま

ま四分煮出す」

×

×

×

四分後——千晴、菜箸でパックを取り出し、パスタを入れて茹でる。

千晴（M）「四分経ったらパックを取り出し、パスタ二百グラムを入れて規定の時間プラス二分茹でる。私が買ったパスタは七分規定だったので、九分茹でる」

千晴、冷蔵庫に磁石でくっつけているタイマーで九分に設定してボタンを押す。

×

×

×

九分後——千晴、鍋の火を止めると、茹で上がったパスタと、鍋底に余った茹で汁を明太子ソースの入ったボウルの中に入れる。

千晴（M）「九分経ったら火を消して、茹で上がったパスタと、鍋底に余った茹で汁を、明太子ソースの入ったボウルの中に入れる」

×

×

×

千晴、計量スプーンで牛乳、そして切ったバターをボウルに加え、トングで全体を和える。

千晴（M）「そこに、牛乳大さじ四杯とバター二十グラムを加えて、バターを溶かすように、そして明太子ソースにパスタの麺が絡むようにして、全体を和えていく」

× × ×

千晴、二枚の皿にパスタを盛り付け、それぞれ上から刻んだ大葉と刻み海苔を添える。

千晴（M）「均等にパスタを盛り付けたら、上から刻んだ大葉と、刻み海苔を適量添える。これで、『だし香る和風明太子パスタ』の完成」

20 完成した『だし香る和風明太子パスタ』

21 アパート・寺川家・居間

千晴がパスタの乗った皿をテーブルに

運んでくる。

千晴「できたよ」

と、振り向く――ベランダで布団を干していた和也が戻ってくる。

和也「美味そうだな」

千晴「あの出汁で、パスタ茹でてみた」

和也「やっぱり、味変わるのかな？」

千晴「分かんない。味見してないから」

和也「してないのか？」

千晴「味見してなくても、私は感覚で分かるの。漁師の娘ですから」

和也「すげえな、相変わらず」

千晴「食べよ」

と、テーブルに向かい合うように座る。

千晴・和也「いただきます」

と、それぞれ食べ始める。

和也「うまッ」

千晴「でしょ。だから言ったじゃん」

和也「よく思いついたな」

千晴「そりゃ私は漁師の娘だからね。海鮮系

の食材を使った料理は、朝飯前なの。それに、多分あの出汁のパックが良いのかも」

と、台所から出汁パックのパッケージを持ってくると、中から一つパックを取り出して、匂いを嗅ぐ。

千晴「ああ、良い匂いする。かつおが強い感じ」

和也「（パックの匂いを嗅いで）ザ・魚介っで感じだな。これと牛乳が合うとは思わなかったけど」

千晴「感覚だよ。AとBを混ぜたら大体こんな味になるかなっていうのは分かるから」

和也「そんな神の舌みたいな技術持ってたのか？」

千晴「ご飯作ってれば、大体分かってくるよ。特に調味料なんかはね。こないだ、肉じゃが作ったでしょ。あれだって、使ってる醤油とかみりんとか砂糖は目分量だよ。こんなもんかなって感じで」

和也「それであの味が出せるなんて、すごい

な。お母さん譲りか」

千晴「大学通ってた時、自炊してたでしょ。

高校の時から台所仕事は手伝ってたから、

そこで何となくの感覚を覚えたんじゃない

かな」

和也「そっか」

千晴、和也をじっと見つめる。

和也「どうした？」

千晴、席を立つと、段ボール箱の中に

手を入れ、手紙を取り出し、和也に渡

す。

千晴「これ、荷物の中に入れてたの」

和也、手紙をじっと見つめる。

千晴「結婚してから、私たち一回も愛媛行っ

てないもんね」

和也「そうだな」

千晴「最後に母さんたちの顔直接見たの、大

学卒業の直前にさ、正式に和也との結婚を

報告するために帰った時だったよね」

22 愛媛・柏原家・居間（回想）

啓造が湯飲みで酒を飲んでいる——傍らに千晴、和也、明日香。

啓造「お前、しんから千晴と結婚するんじゃないの
お」

和也「はい。男に二言はないとお約束したので」

啓造「よし。じゃあ、わしに付き合え」

と、空の湯飲みをもう一つ持ってくる
と、そこに日本酒を入れて和也に渡す。

和也、その酒を一気に飲む——啓造、
更に湯飲みに注いでいく。

和也の声「あの時、お義父さんのペースに合
わせて飲んだから、三杯目にはもうへロヘ
ロだったよな」

× × ×

横になっている和也——啓造、卓袱台
に肘をつきながら、まだ日本酒を飲み
続けている。

啓造「（ケラケラ笑って）弱いなあ、お前」

明日香「（呆れて）どうしようもない」

千晴「父さん、最低……」

23 アパート・寺川家・居間（現在）

千晴と和也が話している。

千晴「良いよ、無理しなくても。最悪、私一人で行くから」

和也「……いや。一緒に帰ろう。お義父さんにもお義母さんにも、あの日以来お会いしてないからな」

千晴「また潰されるかもしれないよ」

和也「あの時は俺もまだ大学生だったからな。けど、今はもう大丈夫だ」

千晴「和也……」

和也「年末、愛媛行くか」

千晴、微笑んで頷く。

つづく